

「俵中学校の板付舟による海峡横断の取組」

1 学校名

瀬戸内町立俵中学校

2 学年・人数

全校生徒（計4人）

3 日時・場所

（1）練習の日時・場所

6月 伊子茂港，俵海岸

（2）発表の日時・場所

6月・須手海岸（古仁屋側）～俵海岸（加計呂麻側）・約8km

4 伝承に取り組んでいる郷土芸能，伝統行事や史跡について

（1）名称

板付舟による海峡横断

（2）由来

板付舟は交通網が発達していない頃海上交通の最たる役割を担っていた。奄美の船の歴史から考えても長い歴史を持つ。本校区の地域社会における先人の昔の生活を体得させ先人の生き様に関心を持たせると共に，体験活動の少なくなりつつある現代の子どもたちに活動を通して連帯感や目的完遂の喜びを味わわせたいと平成2年度から実施され今年で26回目を迎える伝統行事である。

（3）構成等

舵取り1人，漕ぎ手6人の計7人で1艇を漕ぐ。

5 保存会や地域との連携の具体

もともと板付は地域住民が生活するために必要な交通手段であり，生活の道具であった。学校の教育活動として位置付けられたのは平成2年であり，以降生徒の学習の場として，地域とのふれあいの場として今日に活動が受け継がれている。

総合的な学習の時間にオリエンテーションを行い，板付の由来や漕ぎ方などを学び，生徒・教師と一緒に漕ぐ練習も行う。海峡横断当日は，保護者艇や地域艇も参加し，浜ではちぢんを打ち鳴らし高齢者の方の応援もある地域あげての一大イベントと成長している。

6 文化伝承・活用の取組の工夫した点

教育課程上に位置付けて活動するため時数上は制約がある。踊りなどとは異なり，行事としての位置付けであるために計画や手配等は約2か月前から行っている。伝統行事のため，出場チームは保護者・OB・地域・卒業生と種々あり，また監視艇の協力も体制が整っている。他の学校行事との連携もあるため，施設入所者の見学応援なども頂き，地域あげての行事であり，存続するために生徒数減少への対応や活動費の確保などを考えていく必要がある。

7 取組の様子（行事の様子）



【勇壮な生徒艇】



【保護者・地域ゴールを目指して】



【監視艇も援助】



【大賑わいの俵海岸】

8 参加生徒・保護者・保存会・教職員等の感想・意見

【生徒から】

「初めて漕いでみたらきつかった。昔の人はすごい。」

「きつい。こんなことをしていたのか。」

「やり遂げるとやった感がある。」

【保護者から】

「保護者もとても楽しめた。天気によってコースを工夫して行事を続けてほしい。」

「お弁当の日から参加して楽しかった。」

【地域の方々から】

「途中の集落放送など応援していてもわかりやすかった。」

「頑張って漕いでいる姿に感動する。」